



神秘学ポエジー 風遊戯  
photopos  
146

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 292集】 photo ヴァージョン  
photopos 3626-3650

《2024.8.14～ 2024.9.7》

神秘学遊戯団

生と死を超え  
往く者は  
還る者となり

愛する者はやがて愛され  
憎む者はやがて憎まれるように

みずから与える者は  
やがて与えられる者となる

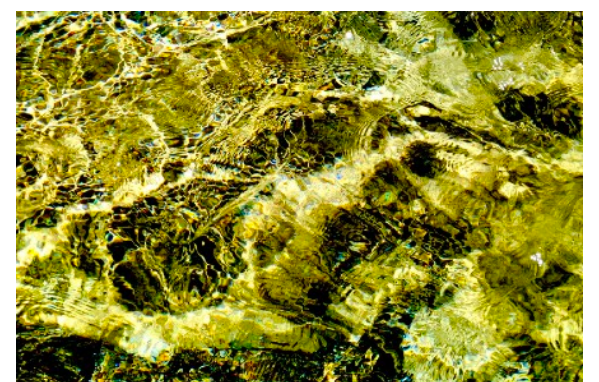
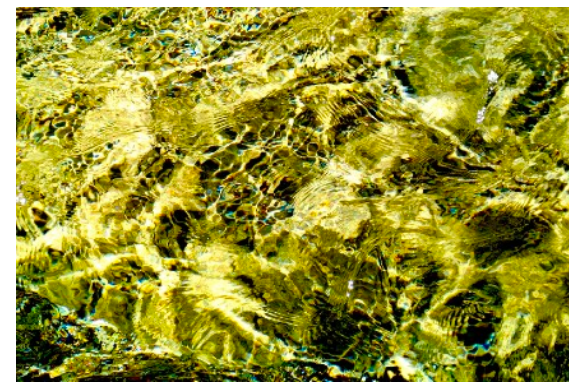
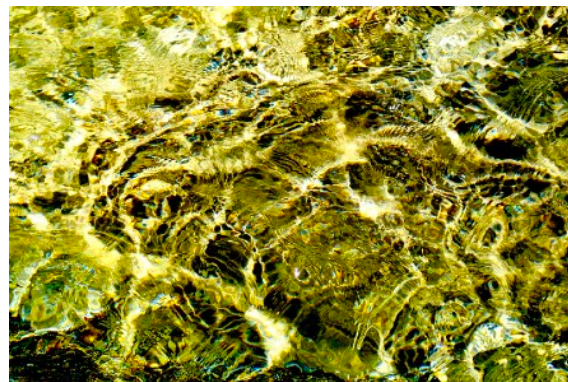
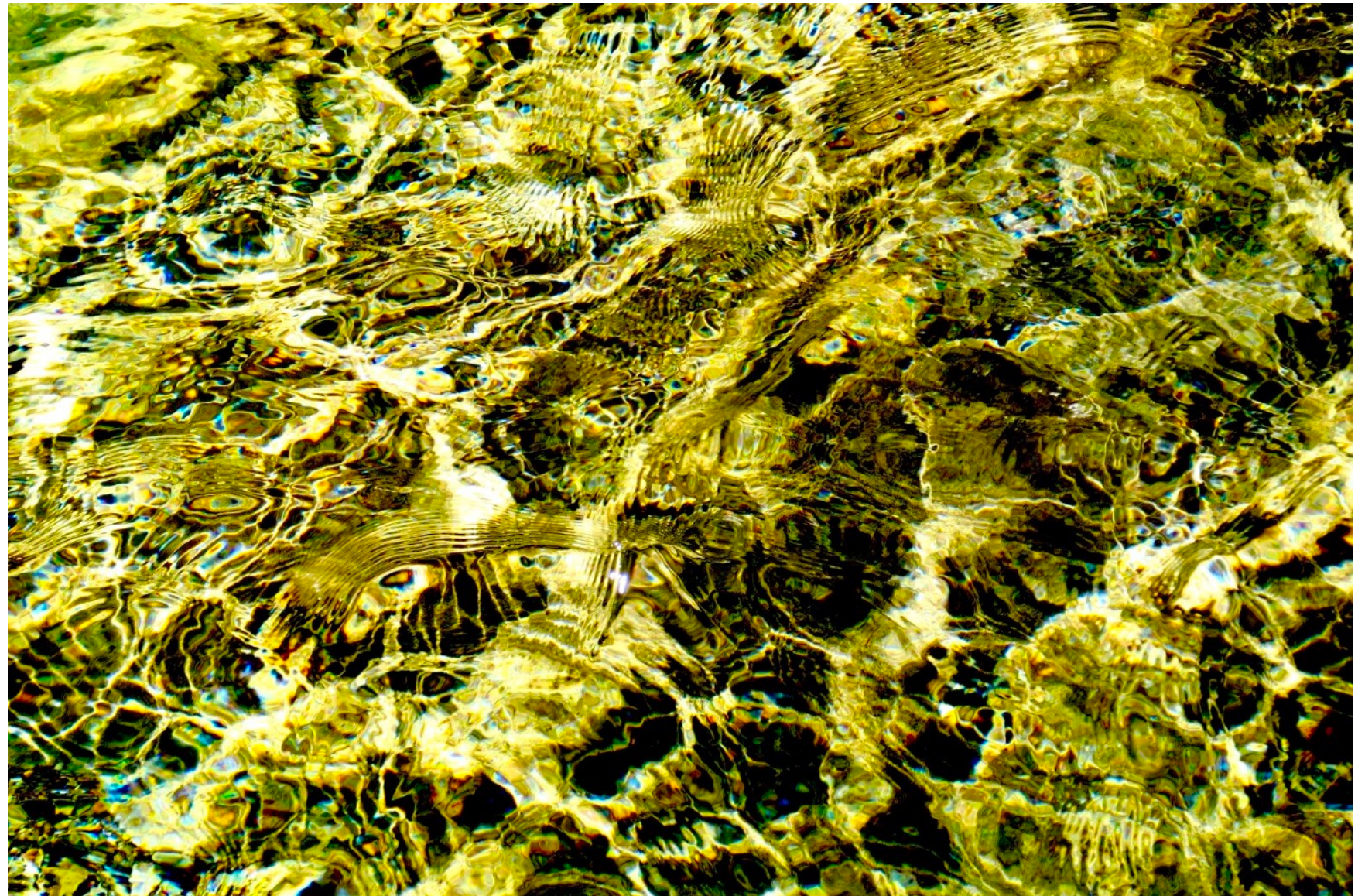
みずからのみを中心として  
自力に恃む者も  
他力に拠らずにいる者はいない

自力は他力へ  
他力は自力へと  
絶対力として循環してやまない

中心はあまねく存在し  
動きのなかで絡まり合い  
同時に生成を続ける

捧げられた感謝も  
宇宙的力学のなかでめぐり  
やがて姿を変えて環流する

たいせつなのは待つことだ  
魂の祝祭は  
たしかな時機にこそ訪れるのだから



＊愛媛県久万高原町・面河溪にて

私たちは  
世界を見る仕方を  
言葉と概念で  
教えられるが

教えられ  
それを身につけ  
疑わないでいることで  
世界はそのなかに  
閉じ込められることになる

時間も  
過去から現在  
現在から未来へと  
一方向に流れているわけではない

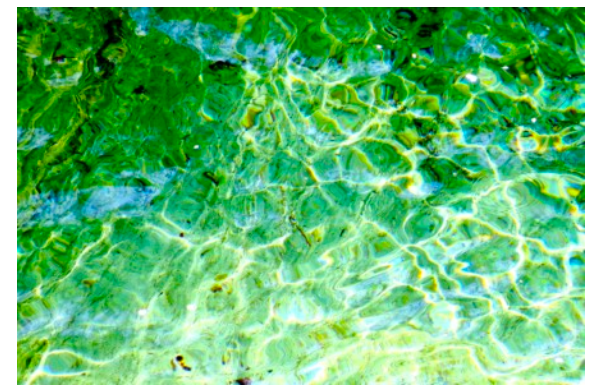
原因があるから  
結果があるのではなく  
結果から原因を  
見つけ出しているのだともいえる

世界のすべての事象は  
互いに関係しあっている

そうであれば  
過去と現在と未来も  
原因と結果も  
日常的な時間を超えて  
自由に遊戯しておかしくはない

私とそのなかにいる  
そう思っている世界から  
私は自由になることができるだろうか

しかもそうして自由に遊び得た後も  
あらためて世界へと帰還し  
そこで自由に生きることさえ  
できるだろうか



＊愛媛県久万高原町・面河溪にて

種が  
滅することで  
あらたな実りを  
大地に生み出すように

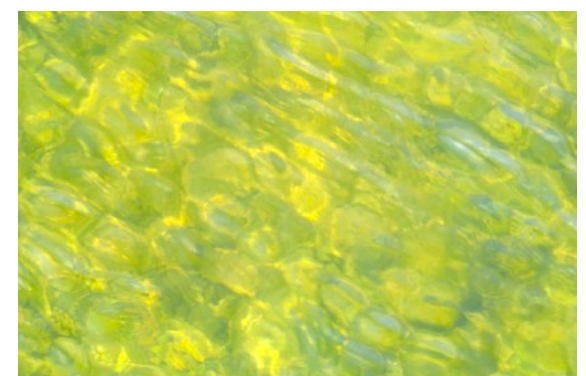
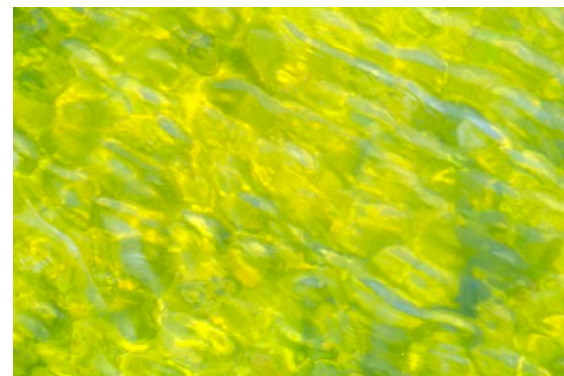
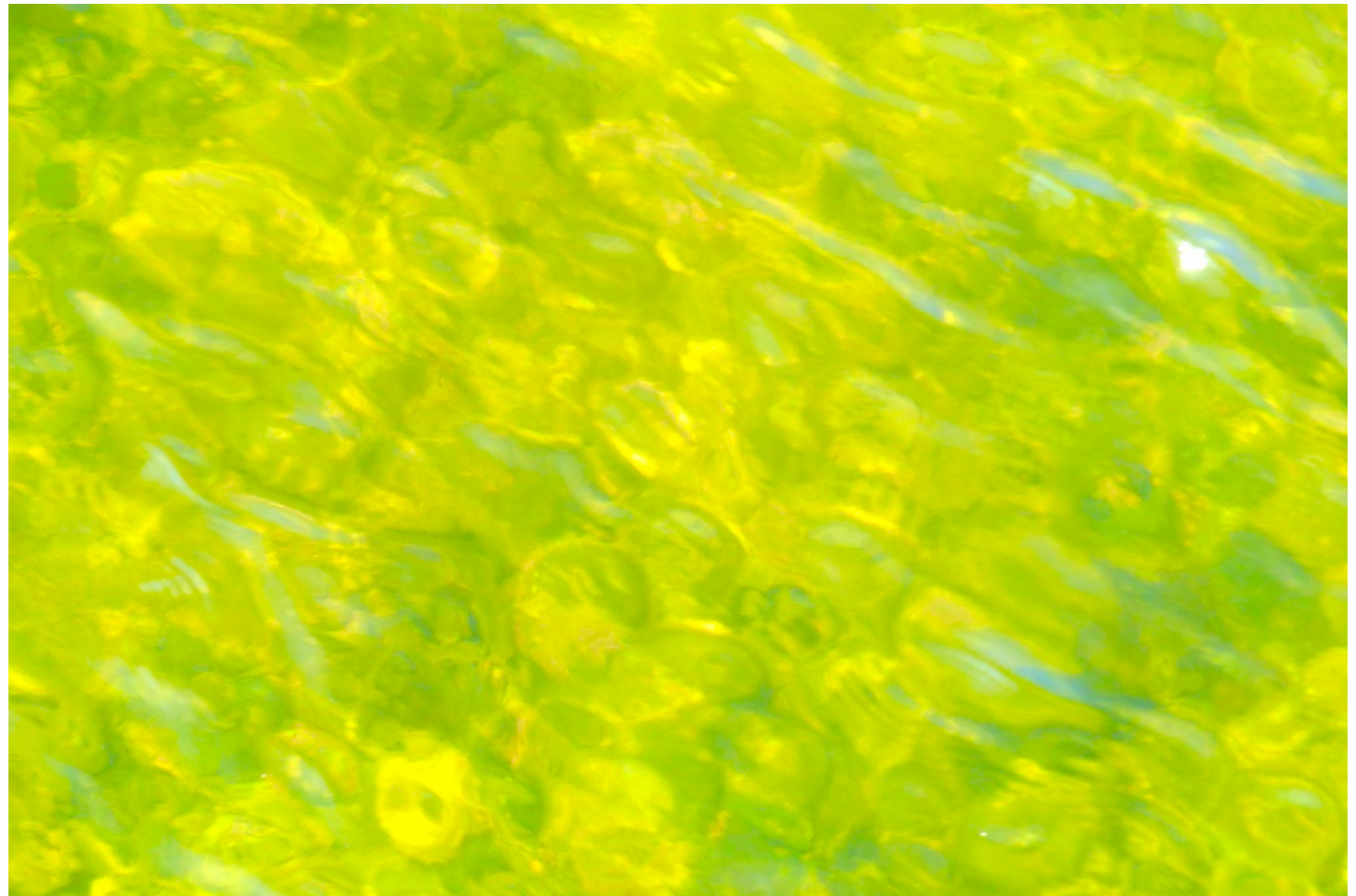
ときには  
蛹のようになって  
完全変態してみるのもいい

じぶんのなかみを  
みんなカオスにして  
眠りのなかで  
あらたな姿を夢みる

そこから  
なにが生まれるか

時は  
滅することで  
あらたな時として  
生まれくるように

わたしもまた  
みずからの種を  
あらたな実りの時へ



＊愛媛県伊予郡砥部町・用水池にて

なにが  
見えているのか

三次元には  
縦横高さがあり  
同じものを見ていると思っても  
そうだとはいかぎらない  
しかも見えるのは  
三次元ではなく  
二次元平面にすぎない

見るためには  
違った角度からも  
見てみなければならない  
それでも  
見えないものは  
見えないままなのだが

見えないことに  
気づくことでひらかれる  
観への扉がある

なにを  
知っているのか

情報には  
さまざまな次元があり  
同じ情報のはずだと思っても  
そうだとはいかぎらない  
しかも知ることができるのは  
多次元的な情報の  
ほんのひとつの次元にすぎない

知るためには  
違った視点からも  
情報を得なければならない  
それでも  
知らないでいることは  
知らないでいるままなのだが

知らないことに  
気づくことでひらかれる  
情報への扉がある



＊愛媛県伊予郡砥部町・用水池にて

わたしはこれから  
どうなっていくのか

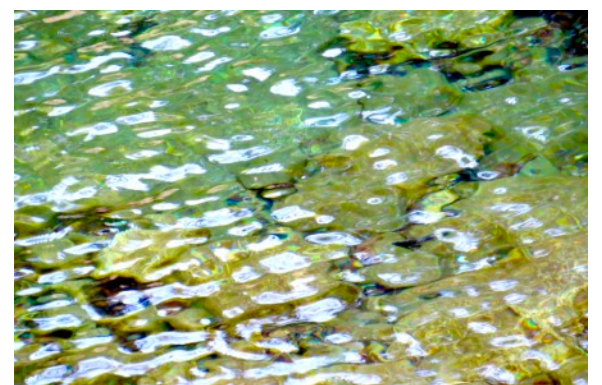
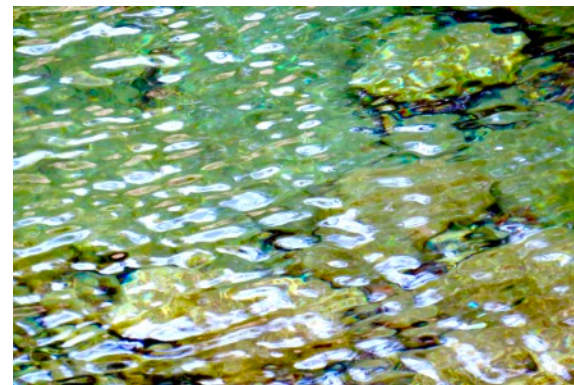
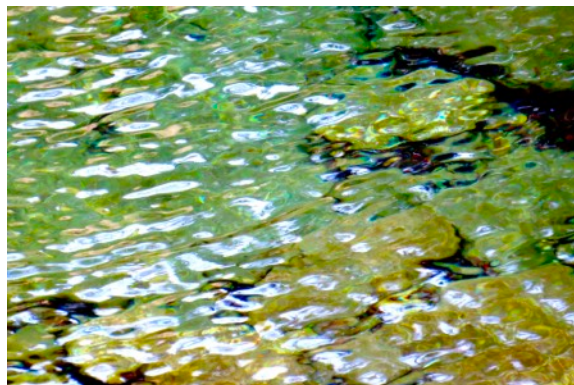
ひとは否応なく  
運命について  
考えてしまいもあるが  
自由はそこにあるのだろうか

自由は与えられるものではなく  
みずから生み出すものであるとしても  
命を運ぶのは果たしてわたしだろうか

わたしが宇宙から  
織りなされた紋様であるならば  
運命は肯定と否定を超えた  
ひとつの恩寵を描いている

なるようになるのか  
それとも  
ならないようにはならないのか

わたしという乗り物は  
運命という謎のまえで  
情け容赦ない必然へと飛翔していく



＊愛媛県久万高原町・面河溪にて

ことばから  
音と響きが  
失われたとき

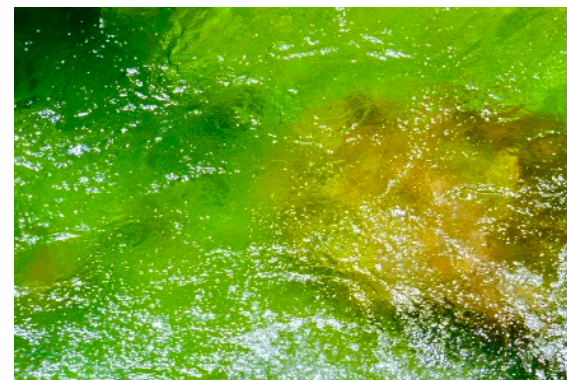
論理や思考だけのことばが  
血と肉を失うように

ことばは  
そのいのちを  
失くしてしまうから

ことばは  
閉じ込められた場所から  
自由になろうと  
その翼をひろげ

ことばの生まれてきた  
その源と響きあいながら

音と響きで  
宇宙を照らしあい  
その音楽を奏でられますように



＊愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

教えられたことを  
問い直す

なぜ  
そうなのか

それには  
どんな意味があるのか

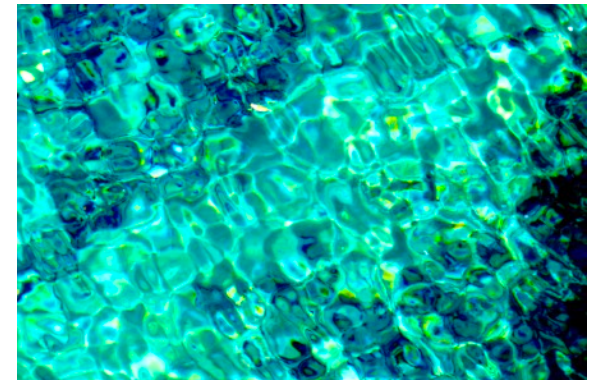
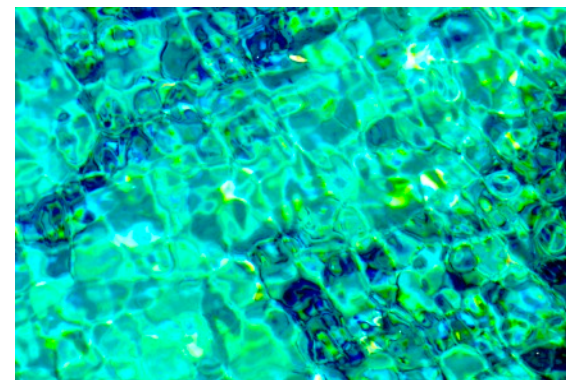
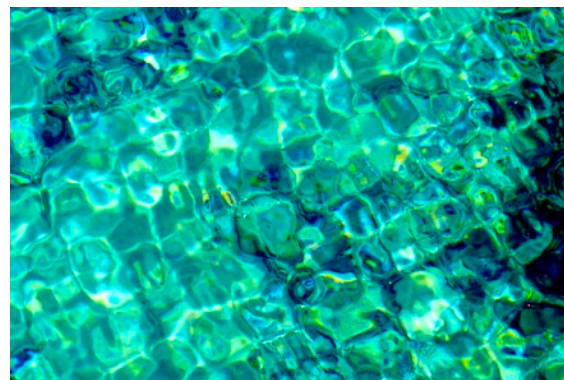
その意味は  
どこからきているのか

だれが  
それを意味づけたのか

そうするうちに  
教えられたことは  
少しずつ  
はじめの姿を変えていきはしないか

仮面が外されると  
そこにあらわれる顔がある

それは  
のっぺらぼうかもしれないが  
考えるということは  
そこからしかはじまらない



本音を隠し  
ときに裏切り  
じぶんをよく見せようとさえする  
そんな嘘をまとった悲しい姿で

じぶんだけに閉じた心を抱えて  
生きていかねばならない

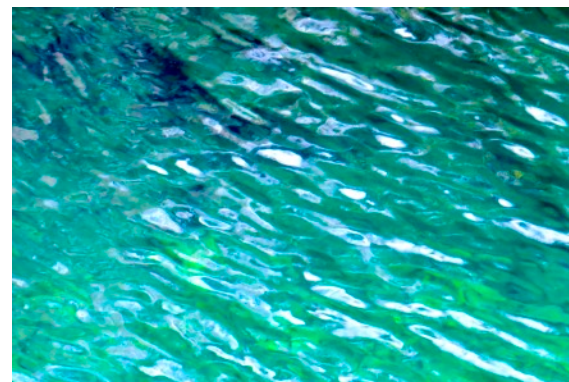
そんな世界に生まれてきたのは  
あえて嘘をつきながらも  
その嘘から自由になるためかもしれない

ひとの心が  
見通せる世界では  
嘘は意味をもたないが

わからない世界だからこそ  
ひとを信頼することを  
学ぶことができる

信頼することは  
じぶんを嘘で  
安心させるためではない

その誘惑に騙されず  
たくさんの避けられない  
嘘のなかにあっても  
注意深くたしかな力を育て  
ともに生きていくためだ



＊愛媛県久万高原町・面河溪にて

世界は  
射影された  
写し絵

立体が  
平面に写されることで  
生まれてくる矛盾も  
ほんらいそこにはないように

世界の矛盾は  
矛盾を逆射影することで  
むすばれなおす

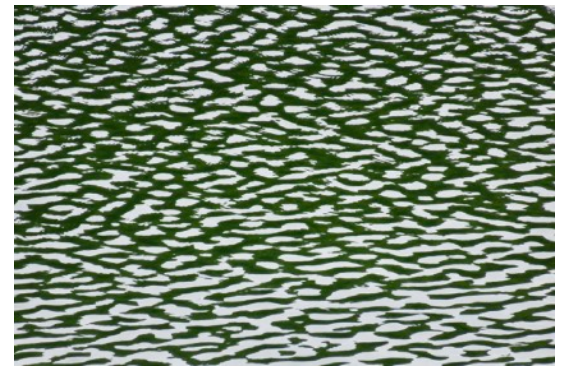
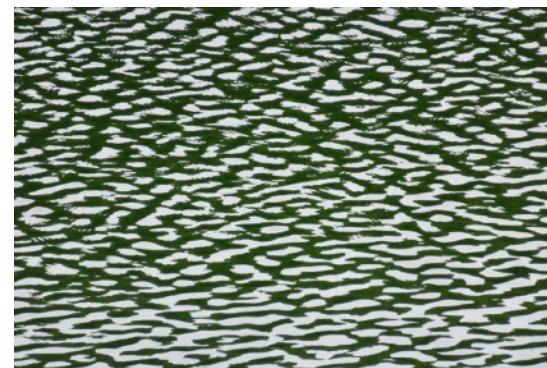
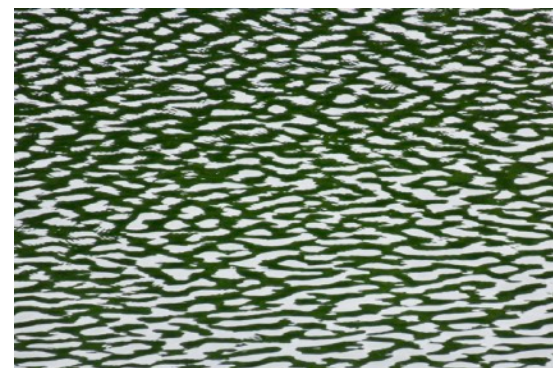
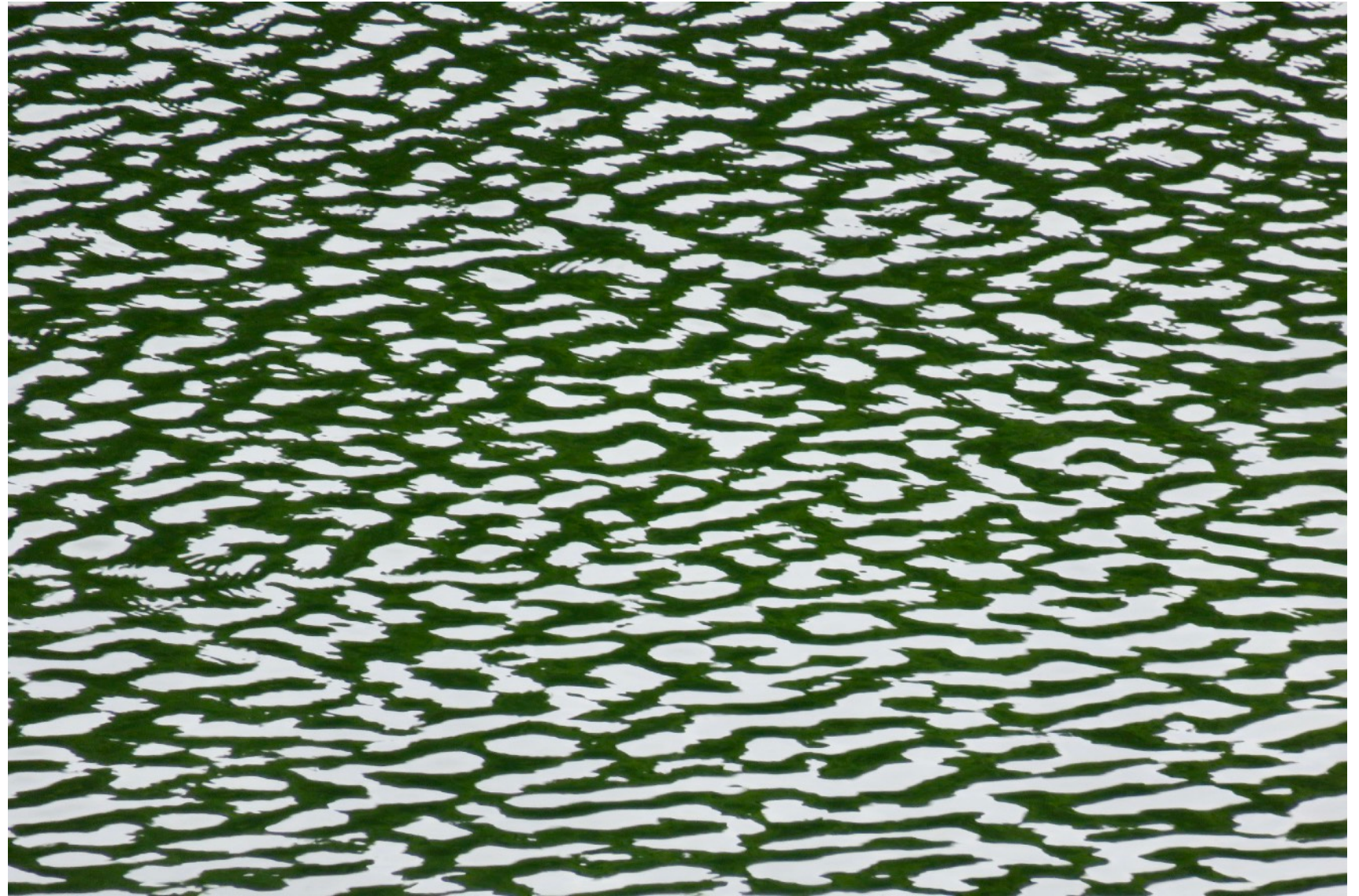
わたしという  
謎のような矛盾も  
わたしという影を  
投げている  
もとの姿さえとらえられれば  
そこに矛盾はないのだろうが

世界は  
そしてわたしは  
ただ写されただけの  
影ではないはずだ

多次元として  
あらわれている姿は  
ともに交叉し  
写しあいながら  
生成し合っているのではないか

筆で描かれた  
大きな円相という  
射影されたかたちのなかにさえ  
全世界が破顔一笑しているように

奏でられた  
一音の響きのなかにさえ  
全世界が歌っているように



＊愛媛県砥部町・用水池にて

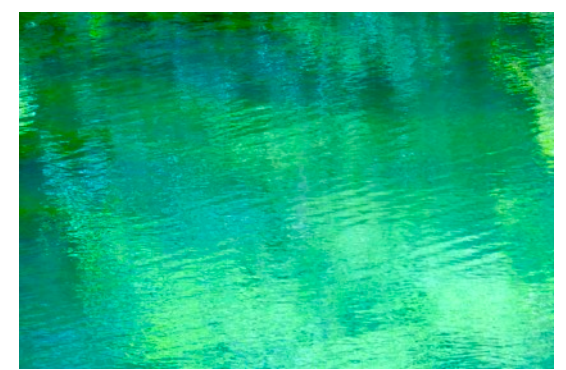
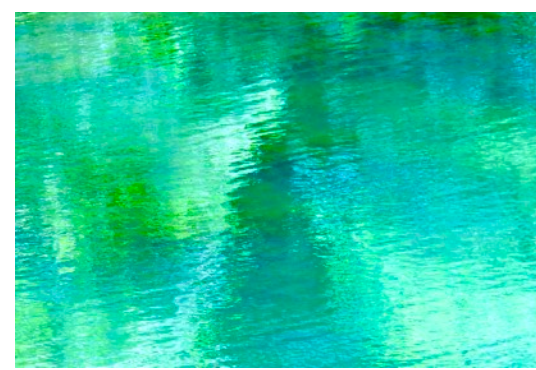
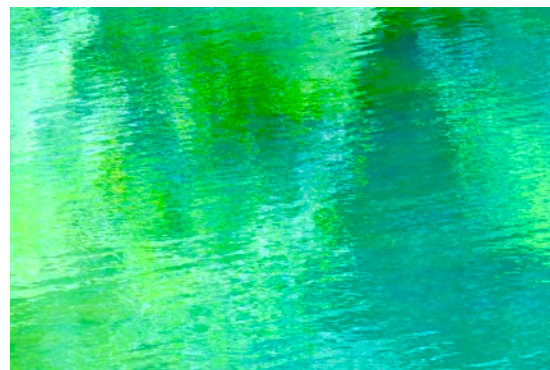
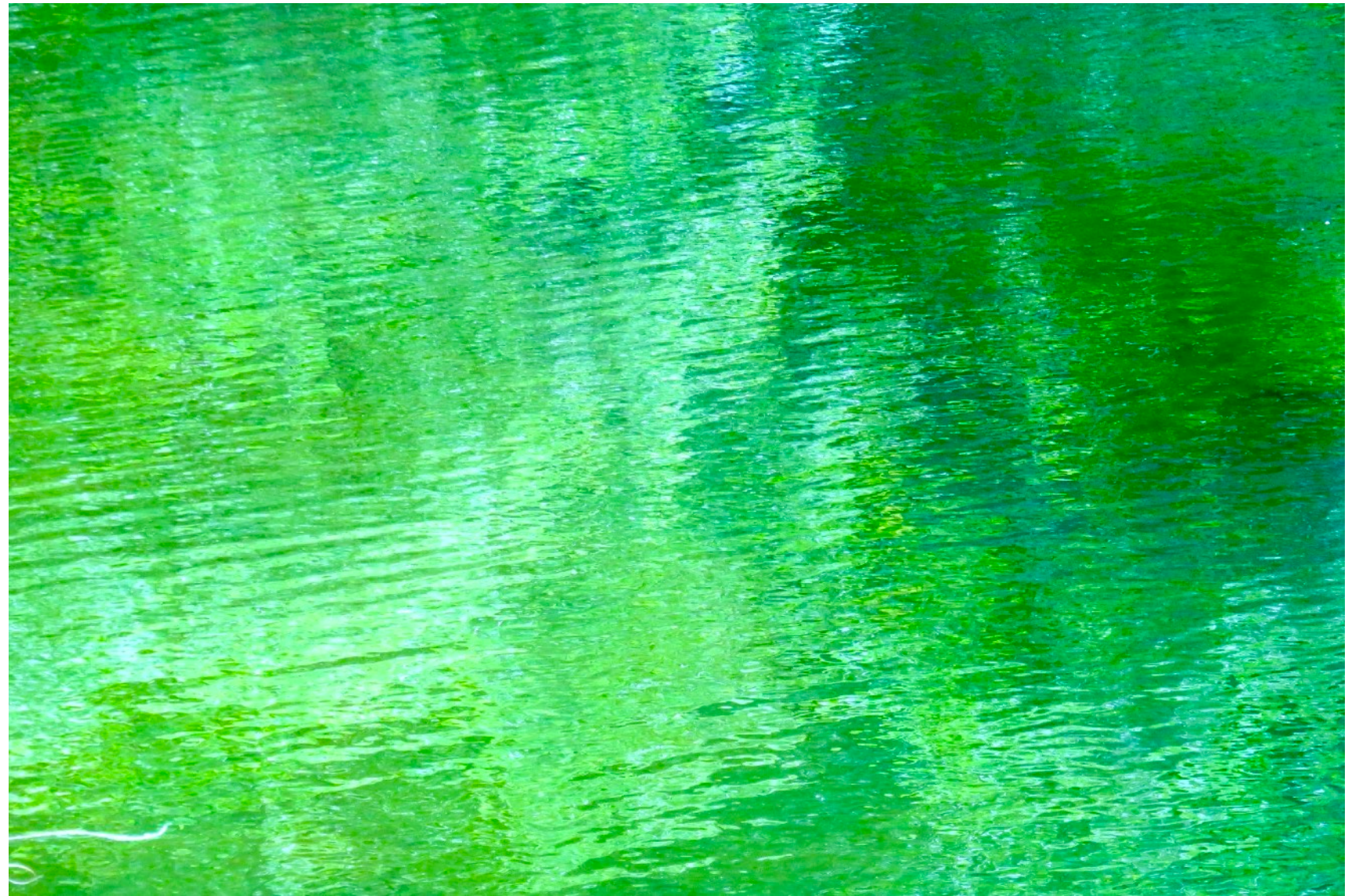
すべてのひとの素顔が失われ  
じぶんの顔を  
思い思いの仮面で覆った  
そんな世界を想像する

そこでは  
素顔への信仰はなく  
仮面への創造性が  
問われることにもなるだろう

仮面とはペルソナであり  
人格でもあるから  
ひとを人格の違いで  
見るということにもなる

人格というかたちが  
個性としてあらわれるとき  
それこそ  
ほんらいの素顔なのかもしれない

けれどそんな素顔が  
まるで見えなくなっている世界だからこそ  
数限りない思い違いや  
化かし合いのなかで  
つくることのできる  
ほんとうの顔も見つかるのではないか



＊愛媛県砥部町・用水池にて

心は謎だ

わたしは  
心をもてあます

じぶんの心が  
わからないからだ

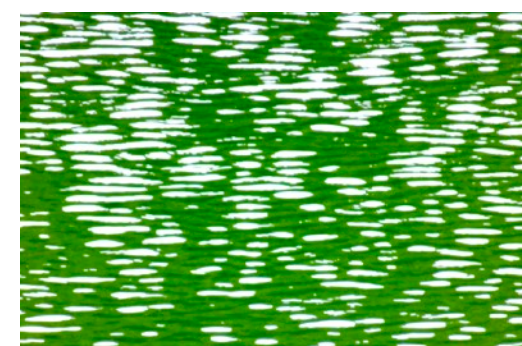
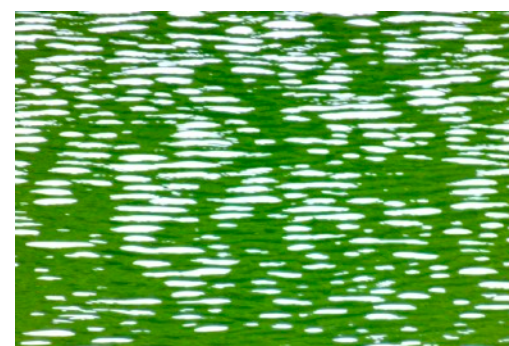
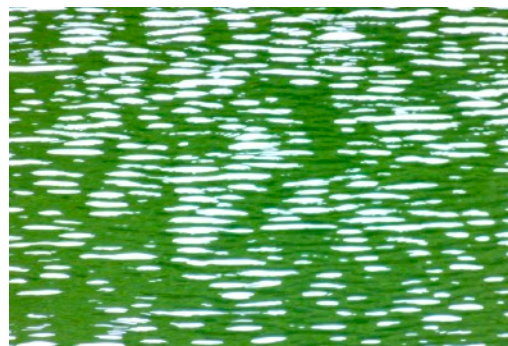
けれど  
じぶんの心の  
すべてが  
わかったとしたら

わたしは  
このわたしで  
いられるだろうか

心は  
わたしを  
はるかにこえて  
ひろがっている

わたしが  
わたしであるのは  
そんな心の  
ほんの一欠片を  
わたしとして  
もてあましながら

それでも  
心の謎に向きあって  
生きているからかもしれない



＊愛媛県砥部町・用水池にて

智慧は  
心だけでは  
得られない

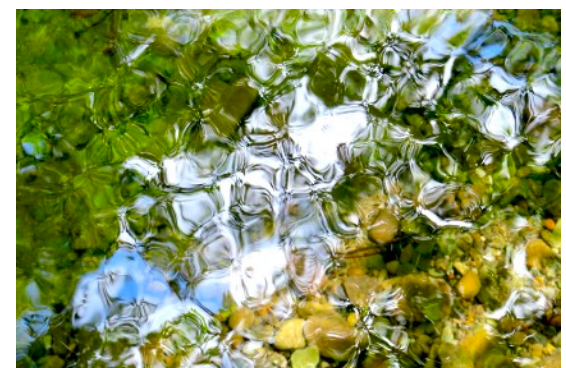
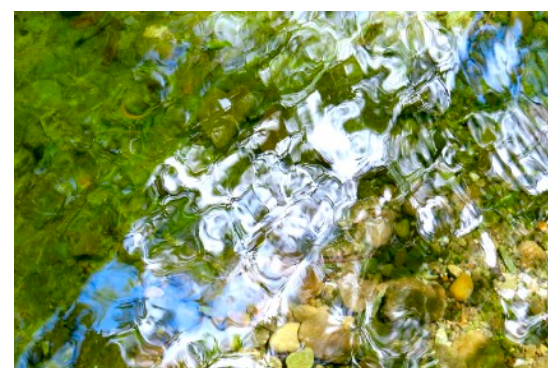
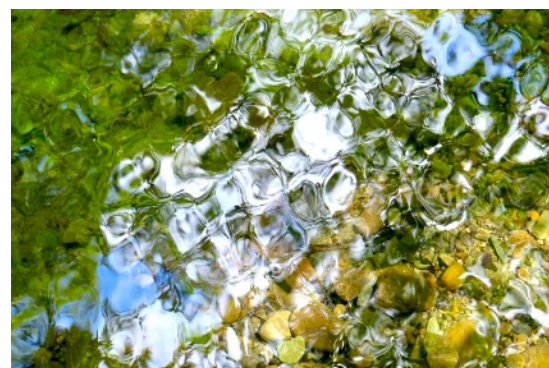
心は  
身なしでは  
生きられず

身は  
心なしでは  
ひとでなし

智慧に  
満ちたとき

心と身は  
ふたつでひとつ  
おなじひとつの  
ふたつの姿

世にありながら  
世を超え  
世を超えながら  
世に生きられますように

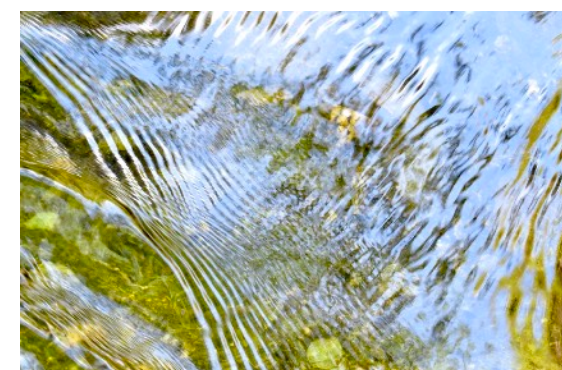
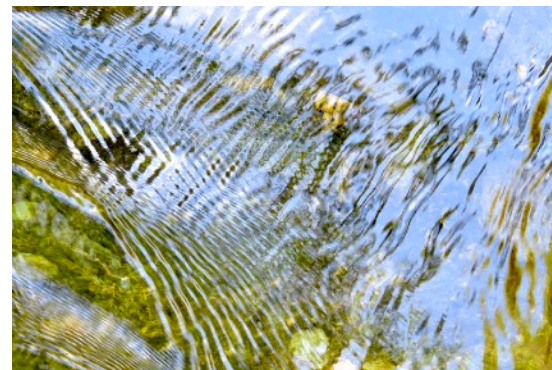
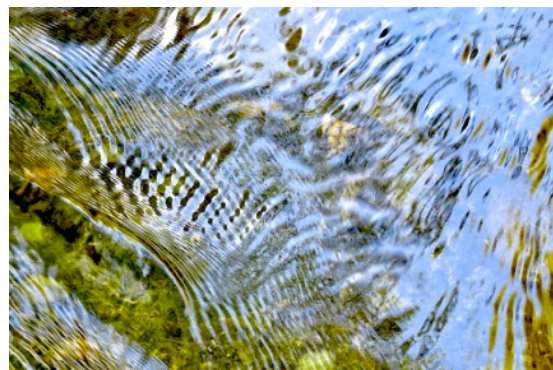
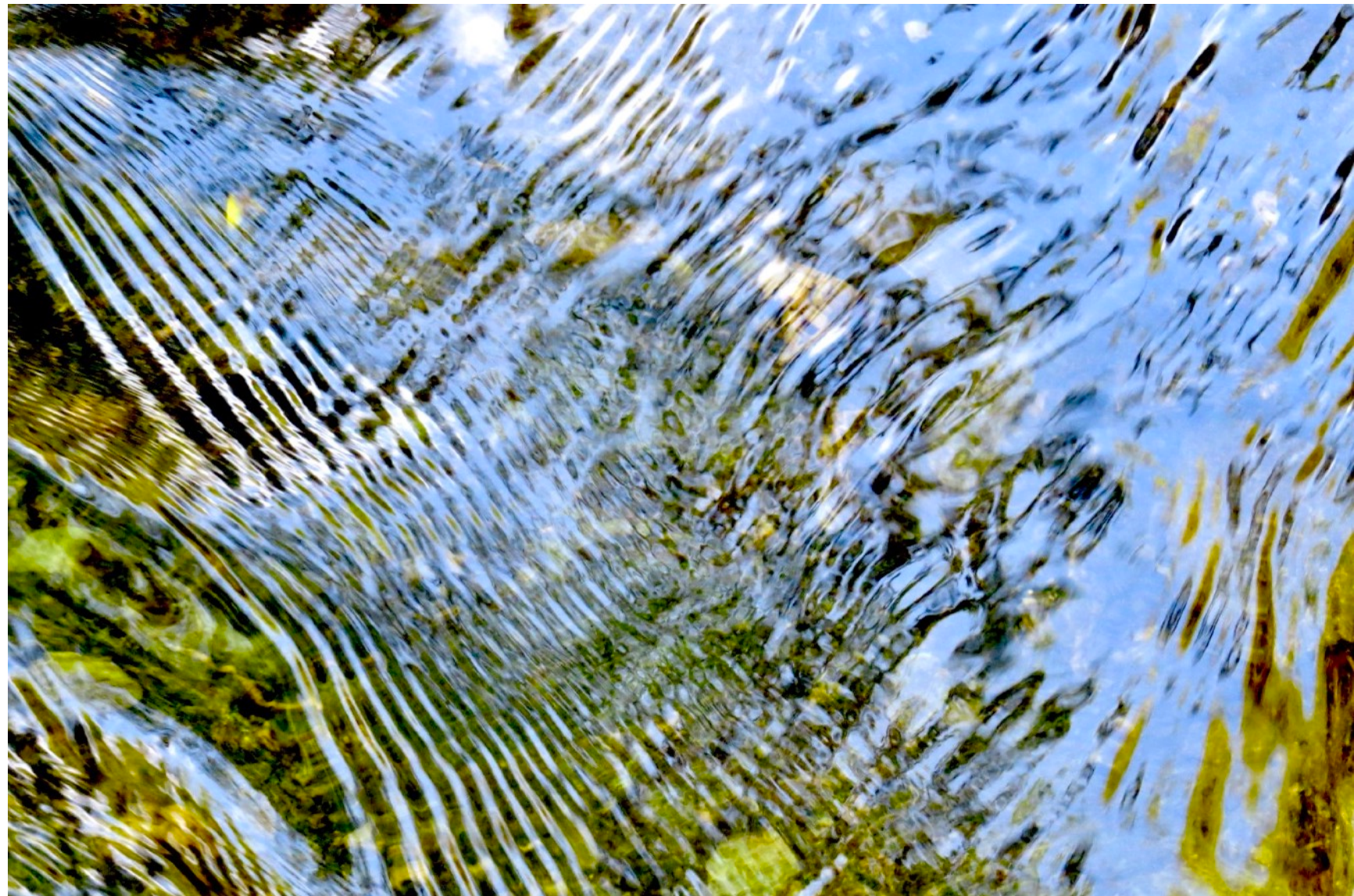


答えが  
すべて決まっていたら  
そんな世界のなかで  
わたしは  
なにを問えばいいのだろう

問うことでこそ  
わたしは  
わたしでいられるのに

わたしの記憶が  
すべて収まっている  
メモリバンクがあったとしたら  
そんな記憶のまえで  
わたしは  
いったい誰だというのだろう

あいまいな記憶とともに  
あらたな記憶を生きることこそ  
わたしは  
わたしでいられるのに



\*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

失うことには  
意味がある

失うことで  
あらたなものを  
得ることができるからだ

覚えただけの知識を  
忘れることで  
あらたに学べるように

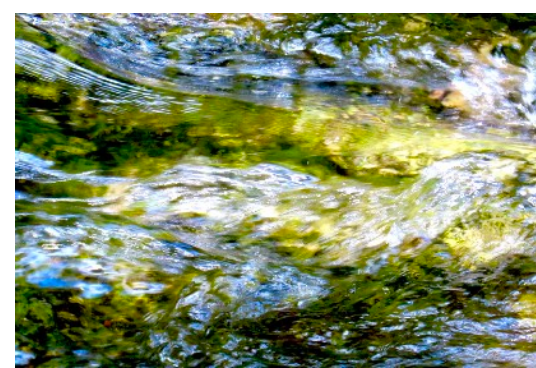
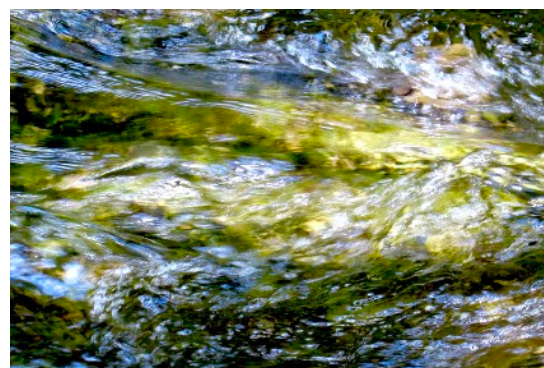
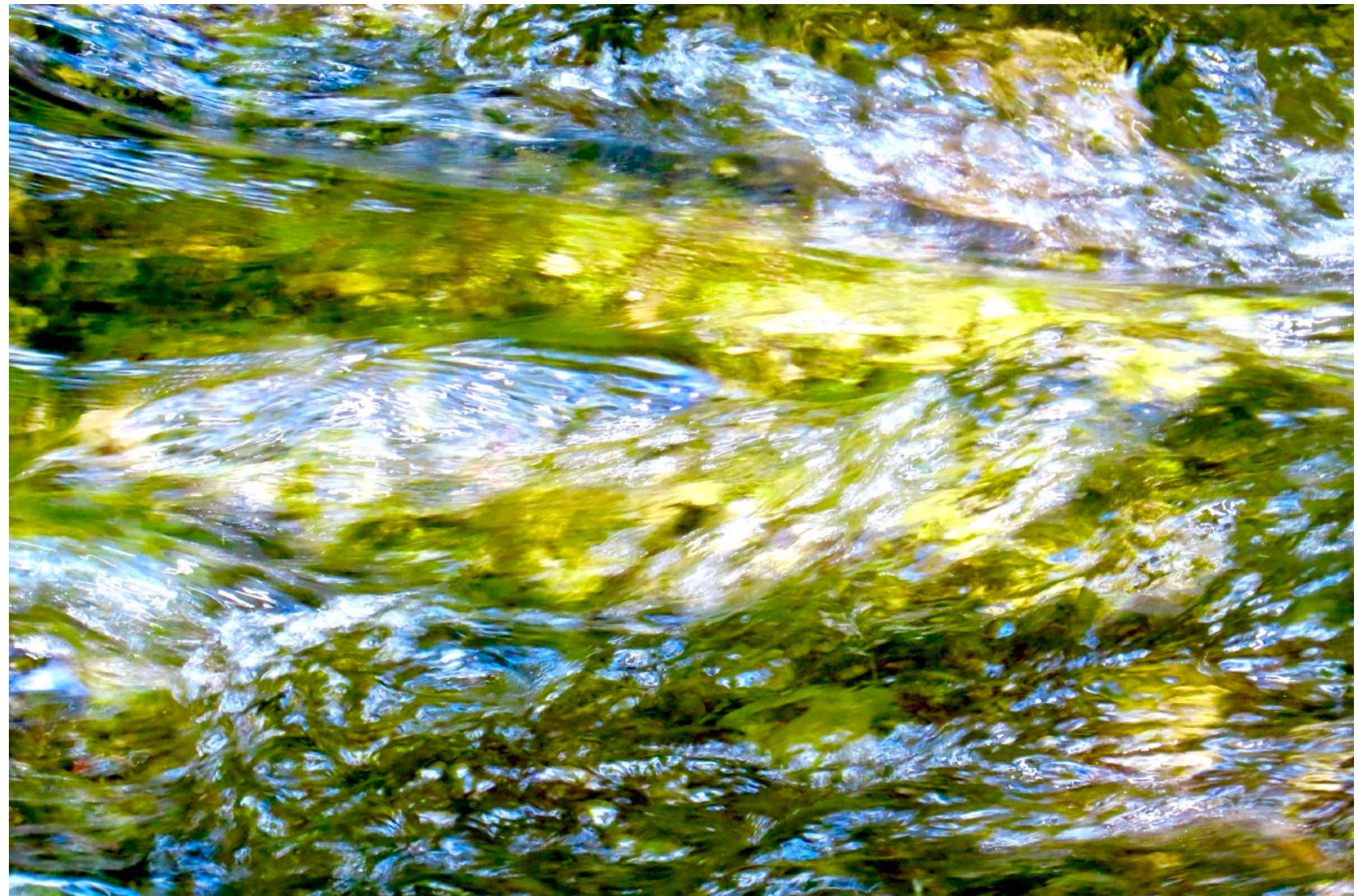
再生する尻尾の力を  
失くすことで  
思考する力を得るように

自然とともにあることを  
忘れることで  
テクネーが可能となるように

かつて生きた記憶を  
忘れ去ることで  
いまこの私があるように

失われるものは  
なにもない

失くしたものは  
姿を変えて現れる



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

なぜ  
そうなのか

わからないときは  
そもそもを問う

そういうものだ  
というのなら  
なぜ  
そういうものなのかを問う

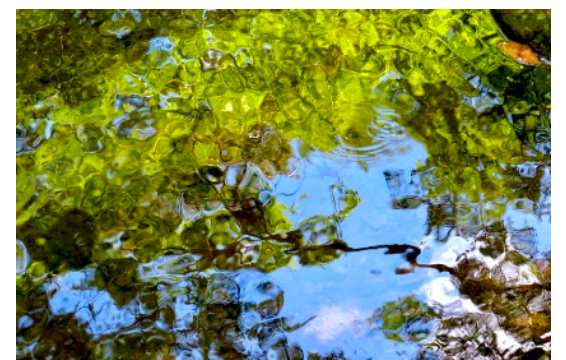
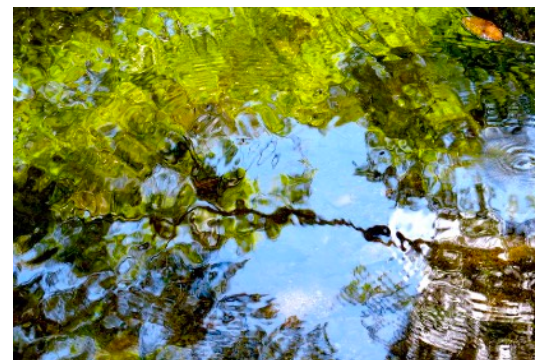
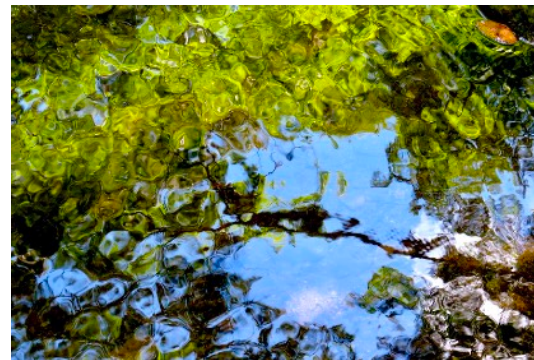
そういうものが  
そもそも  
わからないものならば  
そういうものでなくてもいいはず

なぜ  
そもそもなのかを  
問い直す

そこからしか  
はじまらない自由がある

自由を恐れ  
そもそもへと  
帰っていく者もあるだろうが  
世界はそこで閉じられてしまう

なぜその世界にいるのか  
わからないままに



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

善の反対は  
悪だろうか

善でもなく  
悪でもないところに  
なにかが見つかりはしないか

善になるまえ  
悪になるまえに  
なにがあったのだろうか

善は変わらずにいるだろうか  
悪は変わらずにいるだろうか

その先にあるもののことを  
わたしは夢想してみる

主の反対は  
客だろうか

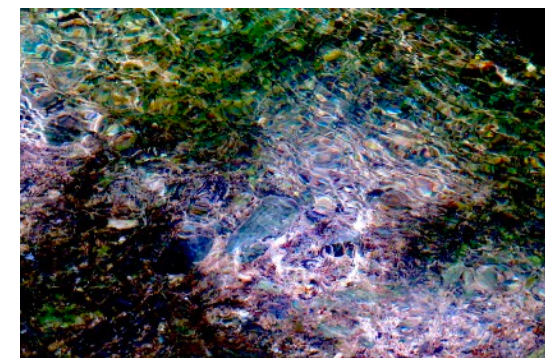
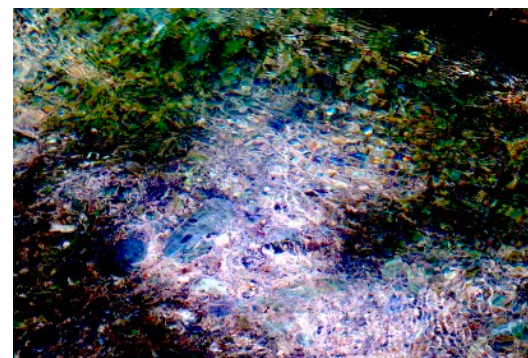
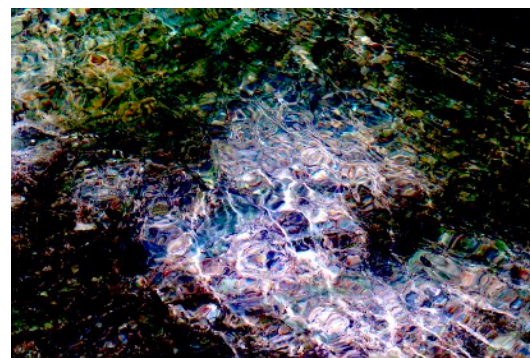
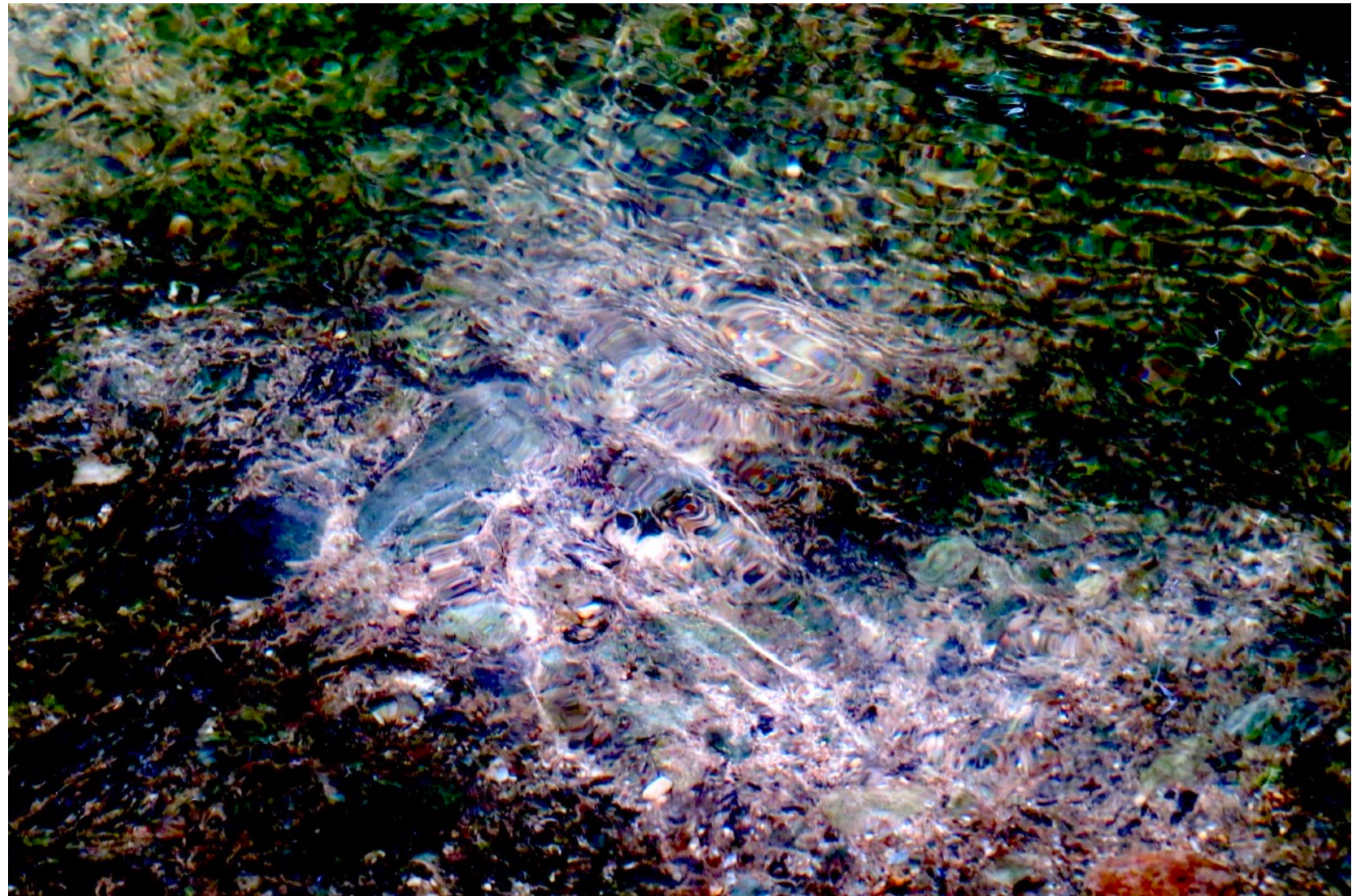
主の先  
客の先で  
むすばれるもののことを  
わたしは夢想してみる

美の反対は  
醜だろうか

美の先  
醜の先で  
変容していくもののことを  
わたしは夢想してみる

楽の反対は  
苦だろうか

楽の先  
苦の先で  
自由を得ていくもののことを  
わたしは夢想してみる



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

わたしは  
わたしになるために  
転生していく

わたしは  
わたしになるために  
迷路を進んでいく

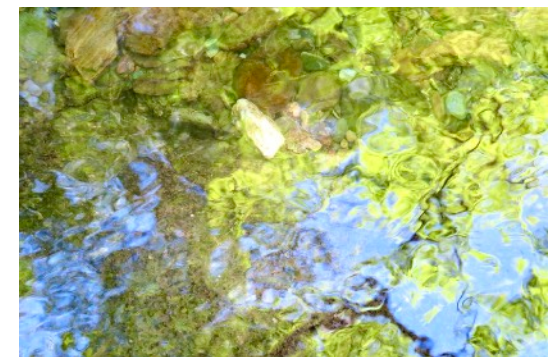
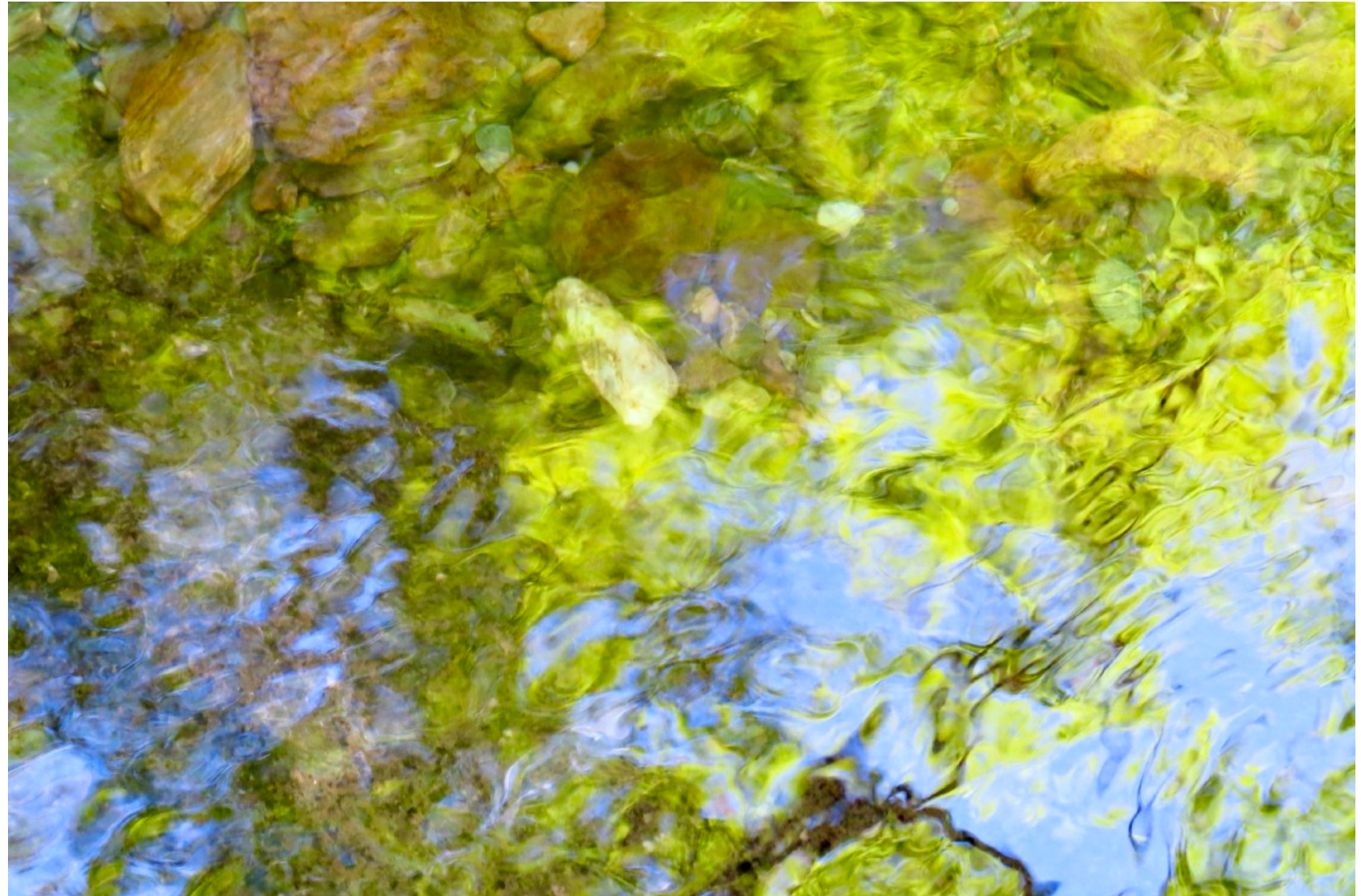
わたしは  
わたしになるために  
惑い誤りながらも

わたしは  
わたしになるために  
あなたを見つける

わたしは  
わたしになるために  
あなたとともに歩き

わたしは  
わたしになるために  
世界とともに生きる

そして  
わたしは  
わたしになるために  
わたしという境をこえてゆく



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

じぶんがなにを  
見ているのかが  
わかるということは

見えていないものへと  
ひらかれているということだ

見えているものにだけ  
とらわれているとき  
そこに自由はない

じぶんがなにを  
考えているのかが  
わかるということは

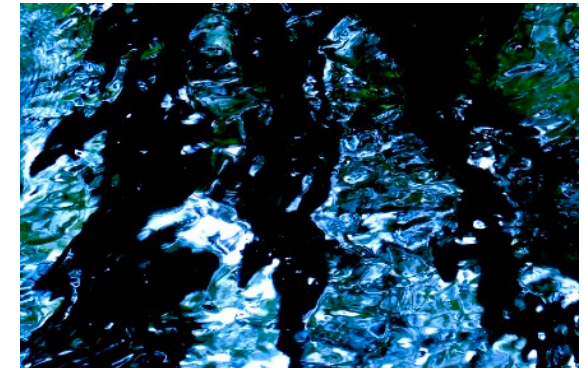
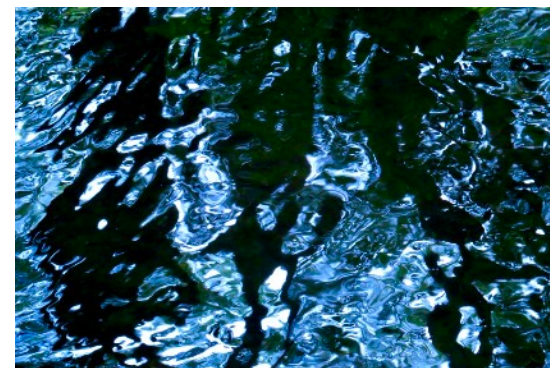
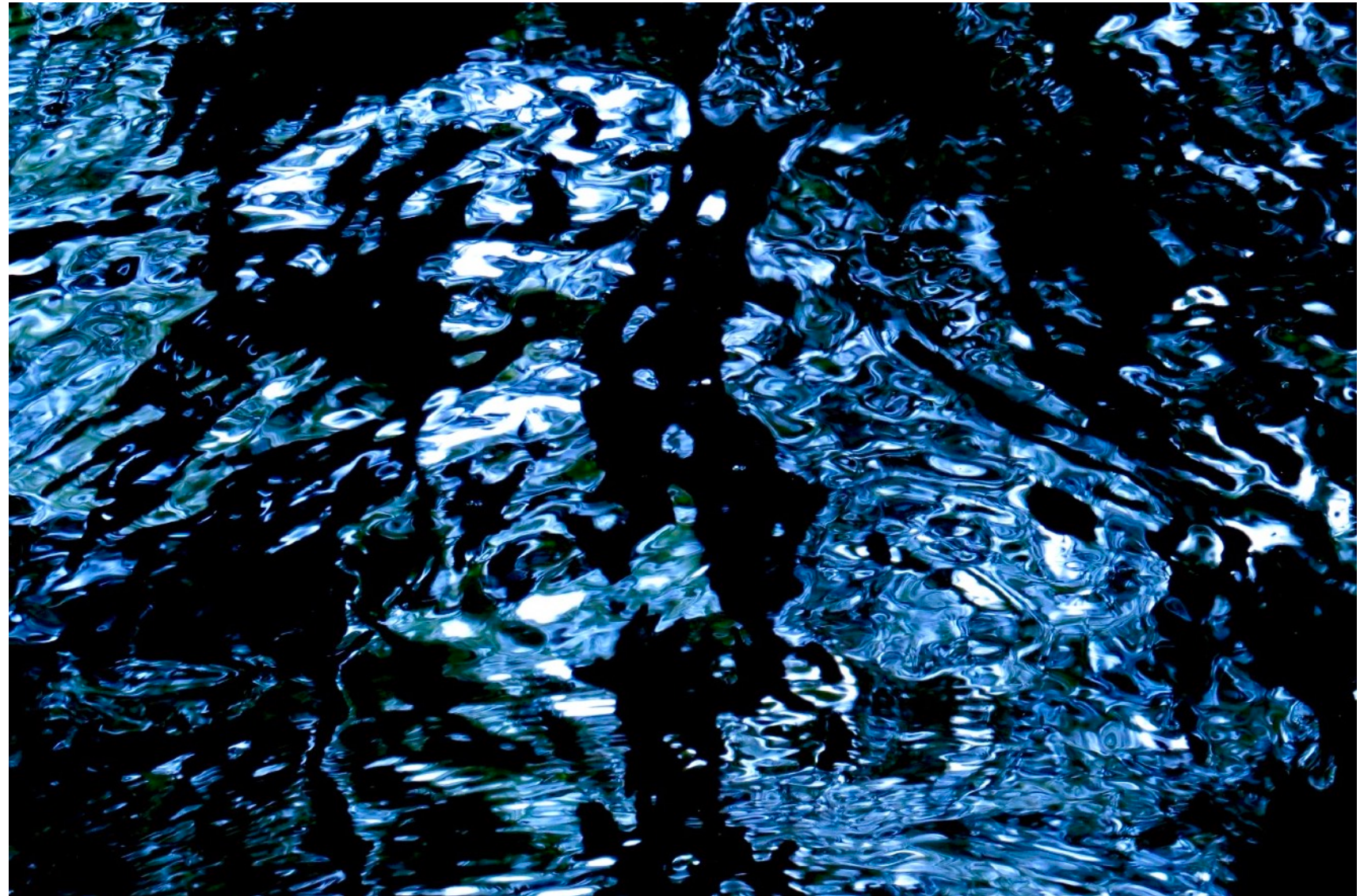
考えていないことへと  
ひらかれているということだ

考えていることだけに  
閉じているとき  
そこに自由はない

わたしが  
わたしであると  
思っているわたしは

わたしではないわたしへと  
ひらかれているということだ

わたしだと思っているわたしに  
溺れているとき  
そこに自由はない



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

言葉を  
尽くしても  
伝わらないことがある

沈黙を  
尽くすことで  
伝わることもある

語ることに溺れる者は  
言葉のなかで  
みずからを見失い

沈黙を生きる者は  
沈黙のなかで  
みずからを見出す

論理は  
論理の外では  
理を失うように

言葉は  
言葉の外では  
意味を見失う

見失われた意味は  
沈黙のなかで  
その種を育てている

沈黙という土壌が  
豊かな滋味に  
充たされてありますように



＊愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

戯れに  
言の葉  
ひとつ  
遊ばせて

戯れに  
こころの  
縛り  
解きはなち

戯れに  
いのちの  
声を  
歌わせて

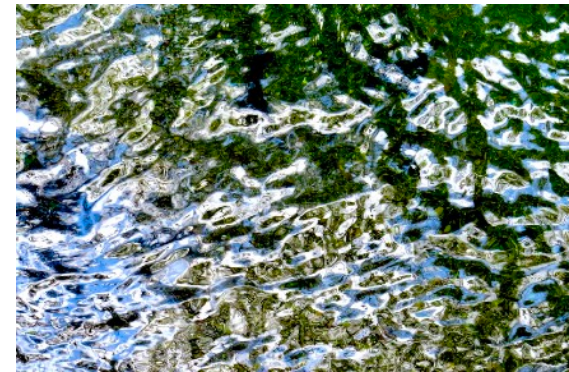
世の憂さ  
忘れ  
笑うとき

笑いのなかに  
あらわれる

秘密の  
とびらは  
開かれる

わたしの奥に  
隠された

秘密の  
智慧は  
開かれる



＊愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

与えたものが  
与えられるのは

目には目を  
でも  
やられたら  
やりかえされる  
のでもない

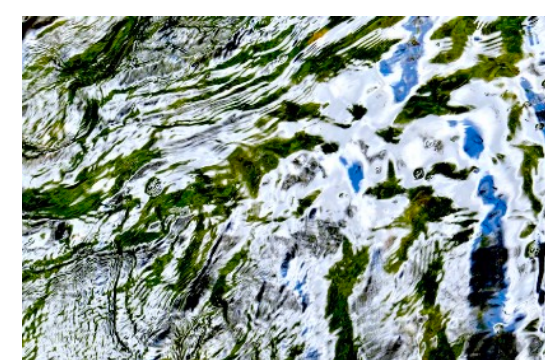
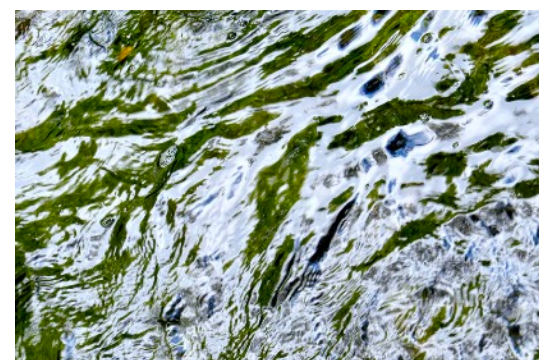
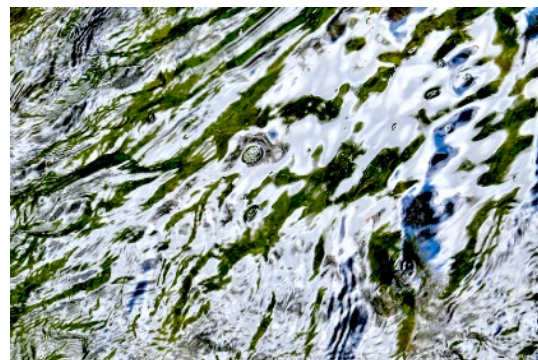
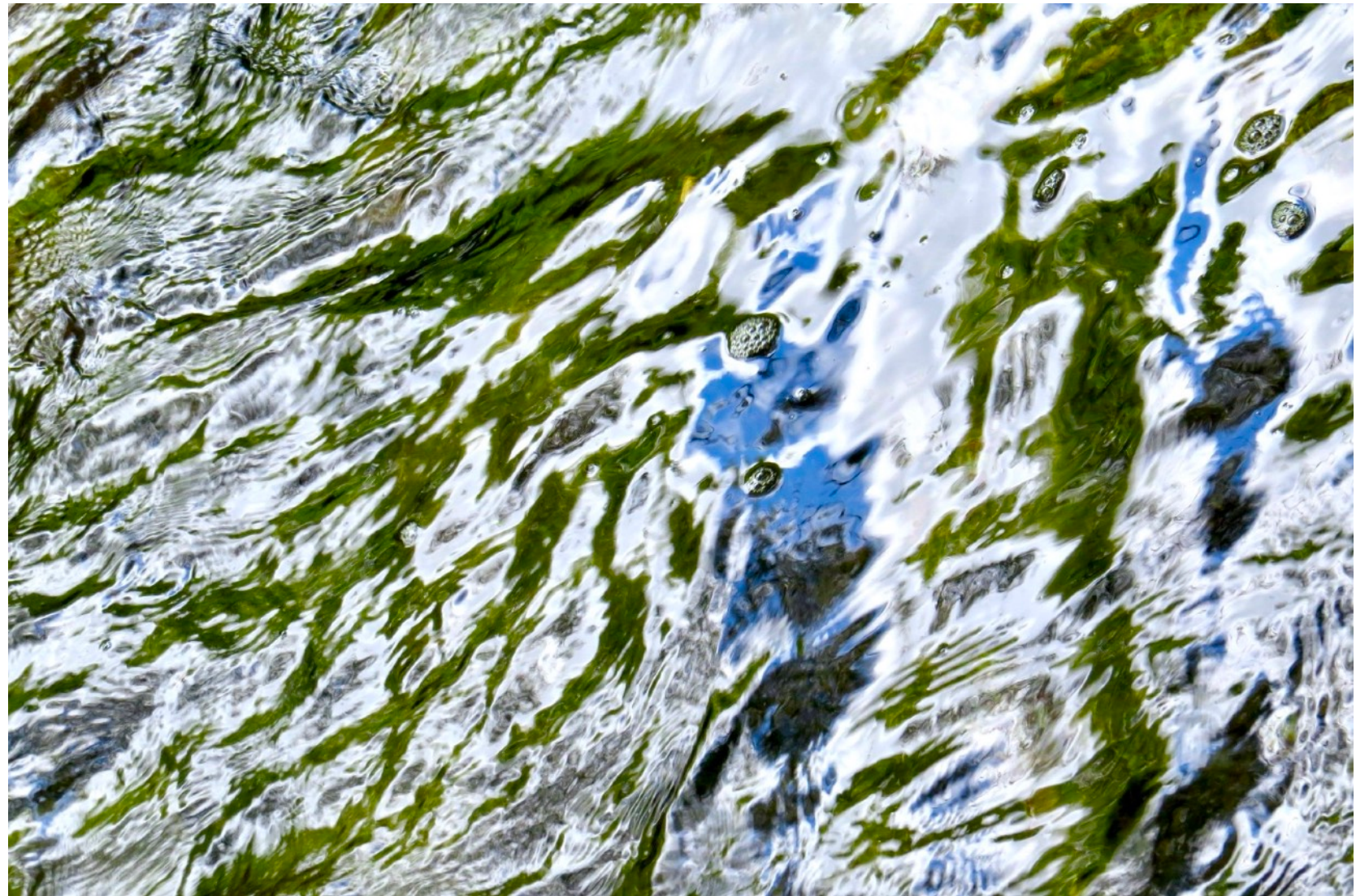
たとえ善きものだと思い  
それを与えたとしても

与えることは  
ひとのために  
与えるということではない

やられたとき  
やりかえせば  
その連鎖は増幅し続いてゆく

与えたということに溺れても  
与えられた者たちが  
そのことで魂の平衡を乱すとしたら  
その連鎖もまた続いてゆく

ひとは  
生まれ死に生まれ死に  
与えたものが与えられながら  
時空を超え  
位相を超えて  
たがいに遊戯しあい  
宇宙を現象させてゆく存在なのだ



＊愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

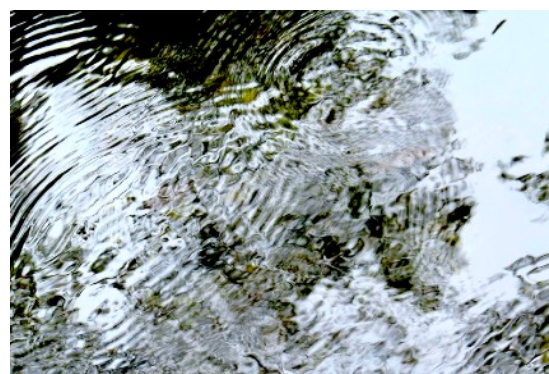
いのちの  
スープ  
いのちの  
言葉

スープに  
生かされ  
言葉に  
生かされ

私たちは  
いのちを  
紡いでいくが

ときに詩人は  
感官をくべ  
心魂を燃やし  
色彩に変え  
音色に変え

みずからのいのちを  
言葉に注ぎすぎるあまり  
その生の力を  
尽くしてしまうのだろうか



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

ひとつだった  
いのちが  
分かれ  
生と死がうまれる

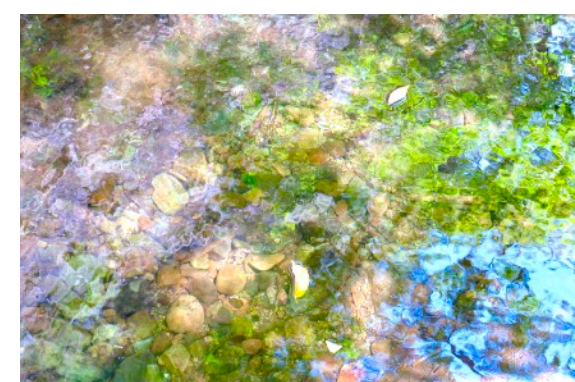
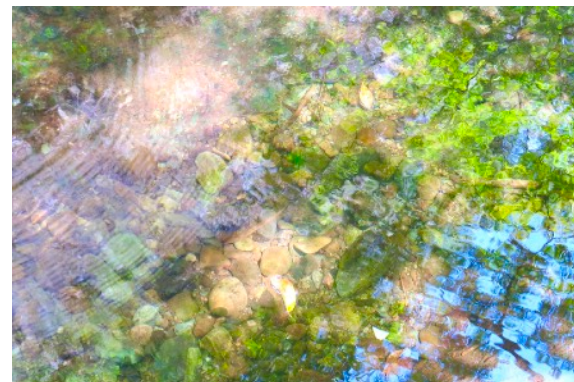
生は  
死を受け入れられず  
死には  
ヴェールがかけられる

やがて  
生と死が  
むすばれ  
いのちの流れを  
旅できますように

ひとつだった  
愛が  
分かれ  
知と信が生まれる

知から  
叡智が失われ  
信から  
認識が失われ  
愛に  
ヴェールがかけられる

やがて  
知と信が  
むすばれ  
愛の秘密を  
味わえますように



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

こころは  
見えない  
けれど  
こころはあって

こころ  
といっても  
からだはあって

からだは  
変わると  
こころも変わる

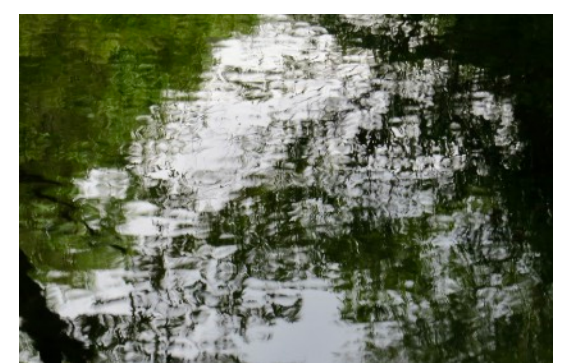
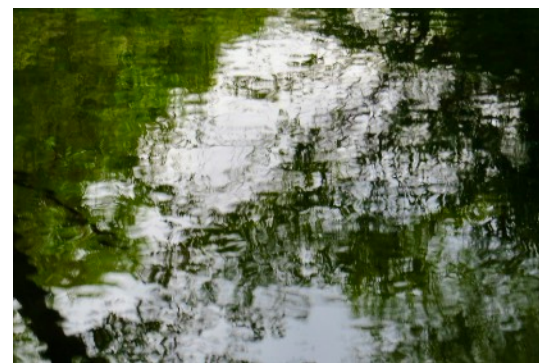
からだは  
見えていても  
からだは  
からで

からだ  
といっても  
こころはあって

こころが  
変わると  
からだも変わる

とかく  
ひとは  
生きづらいけれど

こころはここに  
からだとともに  
否も応もなく  
謎のようにあらわれている



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

詩とは  
答えのない  
謎である

詩の言葉が  
生まれる

するとその多くは  
風に吹かれ  
火に焼かれ  
水に流され

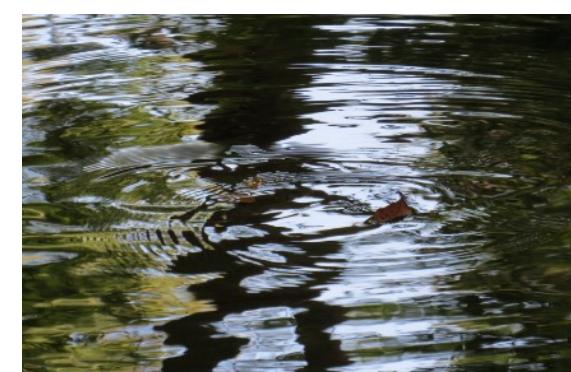
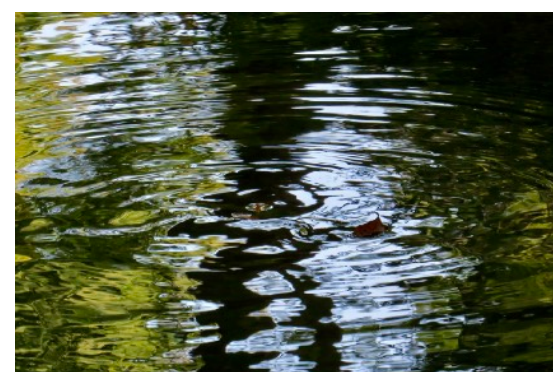
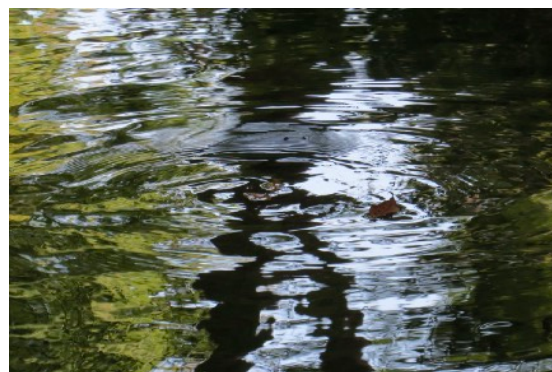
そうして  
だれにも届かないまま  
芽ぶくことさえできず  
干からびて  
消えてゆくだろうが

その種が  
たまたま  
肥沃な土壌に  
落ちたとき

その種から  
あらたな言葉  
あらたな問いが  
育っていくこともある

しかし  
そこにひとつだけの  
答えを求める者は  
詩を見失うことになるだろう

詩とは  
答えのない  
謎であり  
問いを生む  
種なのだから



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて